

世界遺産アカデミー認定講師 File No.56

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓発活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当てて、お話を伺います。第56回は、日本遺産普及協会において、地域の歴史や文化をストーリーとして伝える活動に取り組んでいる降旗 真由美 さんです。世界遺産検定をきっかけに文化遺産への関心を深め、さらに日本遺産に関わるようになった経緯や、日本遺産の視点から文化・歴史の価値を伝えていくことの想いを語っていただきました。

——世界遺産検定が開いた新しい扉

これまで知らなかったものに出逢えること、それが世界遺産の魅力です。人はどうしても、自分の興味のある分野だけに没頭しがちですが、「こんな世界遺産もある」、「自然遺産はこのような形で形成されたのか」と、新しい視点を得ることができます。私自身、当時中学3年生だった次男に勧められて、世界遺産検定の勉強を始めました。息子の受験期と一緒に学ぶことで、母親としての背中を見せられただけでなく、親子の会話も深まりました。SNSで世界遺産を学ぶ方々とも交流し、学びと家族コミュニケーション、仲間との切磋琢磨の両方を楽しんでいます。

特に魅力を感じる世界遺産は、「法隆寺地域の仏教建造物」です。法隆寺の建物は飛鳥時代^{あすか}に建立され、長い歴史の中で様々な人々の手によって守られてきました。金堂の前に立つ灯籠も、飛鳥時代ではなく江戸時代のもので、建物や文化財には、その時代に関わった人々の想いや努力が形となって残されています。修復や再建の方法も時代によって異なるため、同じ建物の中に様々な時代の人々の生き方や価値観を垣間見ることが出来ます。その時代背景を想像すると、歴史の世界が一気に広がります。中でも特に好きなのが、金堂の「釈迦三尊像」^{しやくわさんそんざう}です。仏像と聞くと、「鎌倉大仏」^{かまくらだいはつ}に代表される平安時代以降の丸みを帯びた、ふくよかな姿を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。そちらも魅力的ですが、やはり奈良の飛鳥時代に既に造られていたあの姿、いわゆる「アルカイック・スマイル」の美しさです。以前、人の少ない時間に拝観する機会があり、静寂の中で仏像と向き合うことができました。その真摯な佇まいに心を真っすぐに貫かれるような感覚は、今でも忘れられません。また、法隆寺の金堂壁画は1949年の火災で大きな被害を受けてしまいましたが、焼損した壁画は修復され、現在の金堂には再現模写された壁画が設置されています。この再現には、平山 郁夫 氏をはじめとする著名画家の方々が関わりました。修復や再現の作業では、どうしても描き手の個性が表れてしまうものです。しかし、できる限りオリジナルに近づけるため、個性を抑えながら制作に向き合ったといいます。このように法隆寺では、飛鳥時代から連綿と続く歴史が、目に見える形で私たちに語りかけてくるようです。



法隆寺金堂・灯籠・五重塔・講堂

——世界遺産から日本遺産へ、地域の魅力を伝えたい

世界遺産への関心をより深めたきっかけのひとつは、まさにこの法隆寺で開催された世界遺産検定のイベントでした。受検会場であると同時に、WHA主任研究員の宮澤 光 先生による講演と、現地ガイド付きで見学できる企画があり、既にマイスターではありませんでしたが、「ここで受けてみよう!」と4級を記念受検。また、マイスターとなってから法隆寺に関心を抱くようになった私にとって、この体験は奈良の魅力にいっそう心惹かれる機会となりました。認定講師に認定された後、基本に立ち返ろうと3級公式テキストを手にとった時、冒頭にあった次の言葉に衝撃を受けました。「世界遺産保全の活動の環を広げ、ひいては私たちの暮らす日本の文化や歴史の価値の再発見につながることを希求しています。」目から鱗が落ちる想いでした。日本にはまだ多くの人々が知らない文化や歴史があり、それらを丁寧に伝えることの大切さを、強く感じた瞬間です。そして、世界遺産とは別に、「日本遺産」にも携わるようになり、日本遺産は文化庁の認定制度です。世界遺産が不動産を対象とするのに対し、



宮澤先生と法隆寺にて

日本遺産は有形・無形の文化資源を含めて地域を面として捉え、そこにあるストーリーを地域全体として捉える特徴があります。所属する日本遺産普及協会では、地域の歴史や文化をストーリーとして伝え、観光や地域活性化に繋げる活動を行っています。私自身、地域活性化の軸はふたつあると考えています。ひとつは観光を通じた経済活性化、もうひとつは地域の人々のアイデンティティ創出です。「自分たちは素晴らしい場所に住んでいる」、「自分たちは魅力的な文化を受け継いでいる」と主体的に実感していただくことが、日本遺産の重要な役割です。「飛鳥・藤原の宮都」は、『日本国創成のとき～飛鳥を翔けた女性たち～』というタイトルの日本遺産に登録されています。推古天皇、斉明(皇極)天皇、持統天皇、善信尼、額田王、女性5名の視点から飛鳥の歴史を伝えるストーリーが展開されています。以前、お話をお聴きした明日香村の方からは、世界遺産の構成資産となっていない場所を日本遺産として補完しながら、地域全体の魅力を相互に伝えていきたい、と仰っていました。日本遺産は全



石舞台古墳

国定数104件で、現時点ではこれ以上増える予定はありません。登録だけで終わらずに、そこからどのように地域活性化に繋げていくかが課題です。行政や自治体だけでなく、民間団体や地域の人々も巻き込んで、長期的に守り育てていくことが求められます。とりわけ訪日観光客はストーリー性のある歴史や文化に関心が高く、そういった方々に届けられるような情報発信、日本遺産というワードを広めていくことが必要です。日本遺産普及協会では、現地の方々と訪れる人々を繋ぐ“橋渡し役”として、地域の魅力を伝える活動に取り組んでいます。

——次世代へ紡ぐ、文化と歴史の価値

世界遺産アカデミー認定講師として、日本遺産に携わるひとりとして、日本の素晴らしい文化や歴史を丁寧に伝えていきたい。特に少子化が進む中で、これからの担う子どもたちに伝えることの大切さを感じます。世界遺産の学びを通して、世界遺産の意義や物事の本質を理解することで、子どもたちは自分の興味や将来の可能性を見つけ、理工系や考古学など様々な分野に目を広げることできます。日本は長い歴史を持つ国で、アイヌ民族や琉球王国のような固有の文化も存在しています。その土地に暮らす人々や歴史、文化を知ること、地域の魅力をより深く理解できます。私にとって、世界遺産検定は新しい世界に出逢い、日本遺産の活動にも関わるきっかけとなった人生の起点です。これからも、文化や歴史の価値を丁寧に伝え、次世代へ繋げていきたいと思っています。



日本遺産マルシェにて